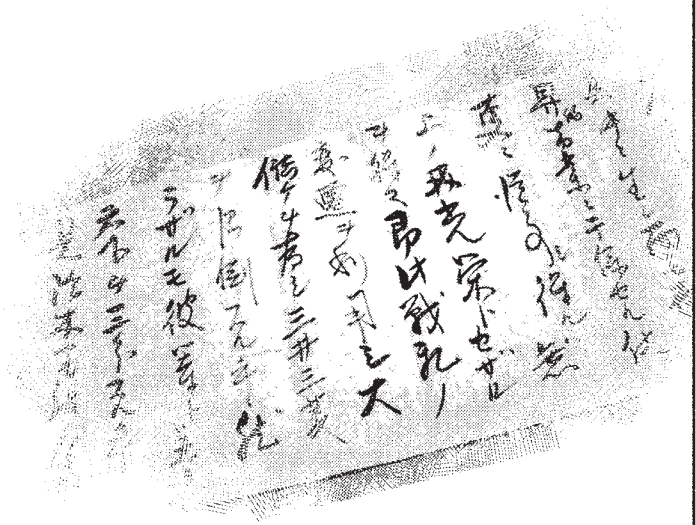


第4章

鈴木商店

天下三分の宣誓書、日本一へ

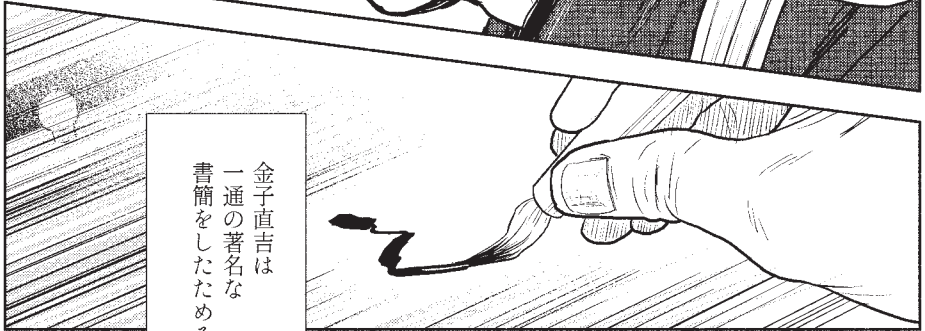




大正四(一九一五)年の
ことであつた



高畑……
そしてロンドンの皆に
わしの気持ちを
伝えるんじゃ……



金子直吉は
一通の著名な
書簡をしたためる

今当店の為し居る計画は凡て満点の成績にて進みつつ在り、

御互に商人として此の大乱の真中に生れ、

而も世界的商業に關係せる仕事に従事し得るは

無上の光榮とせざるを得ず即ち此戦乱の変遷を利用し

大儲けを為し三井三菱を圧倒する乎、

然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、

是鈴木商店全員の理想とする所也。

是が為め生命を五年や十年早くするも

縮小するも更に厭う所にあらず。

要は、成功如何に在りと考え日々奮戦罷在り

恐らくは独乙皇帝カイゼルと雖も

小生程働き居らざるべしと自任し居る所也。

ロンドンの諸君是に協力を切望す。

小生が須磨自宅に於て出勤前此書を認むるは、

日本海々戦に於ける東郷大将が彼の

「皇国の興廢此の一挙に在り」と信号したると

同一の心持也。

十一月一日

須磨自宅にて 金子直吉

高畑君

小林君

小川君

度々修るの得ん
上ノ我々栄トせん
得乎、易け我れノ
妻遷テ利ヲ計トス
信テ友ト三井三菱
倒スル事也
吾等彼等ト
天下三分

この書簡は
「天下三分の宣誓書」
と呼ばれる



大正六(一九一七)年
鈴木商店の貿易年商は二五億四〇〇〇万円に達し
財閥を遙かに上回る

ここに鈴木商店は
日本一の総合商社となった
その売上規模は実に
GNPの一割にも相当した